

りぼん

vol.22
2016.8



色々な国の 男女共同参画



今回の『りぼん』では、日本の良いところや、これからの課題を認識するために、新見で生活されている外国人の方に日本との違いについてインタビューをしました。

ティムさん
(アメリカ・カリフォルニア)

ジャックさん
(イングランド)

ウウムさん
(インドネシア)

今回は3人の編集員が
インタビューに行きました

谷岡記者

岡本記者

渡辺記者

アンドリさん
(インドネシア)

リンさん
(フィリピン)

ラマさん
(インドネシア)

子育てのしるし

Q 日本では母親が主にしていますが、あなたの国ではどうですか？
また、親が仕事復帰した場合子どもをどこに預けますか？



A
ティムさん
(アメリカ)
カリフォルニア

夫婦で協力しているよ。産後休暇は男性も女性も取らないといけないことになっているんだ。

また、会社に子どもを預けることができるところが多いんだ。なければ、民間の保育施設に預けることができるよ。



リンさん
(日本)

主に母親がするの。母親が働いている場合は祖母がするわ。

休暇は1年間取ることができんだけど、3か月以降は給料が出なくなるから、3か月で仕事復帰する人が多いの。

日本でいう保育所のようなものはなく、親戚が家に来て面倒をみられるの。



ジャックさん
(イングランド)

母親が子育てをする割合が高いけど、父親も積極的に育児に関わっているよ。

日本のような公立の幼稚園が少ないので、コストはかかるんだ。「ナニー」という、家に住んでもらって育児をしてもらう人を雇う人もいますよ。

家庭での役割分担について

Q 日本では家事に積極的に取り組む若い男性が増えていますが、あなたの国ではどうですか？

また、親の介護が必要になった際には誰が介護を行いますか？



A
ティムさん

家事は男性、女性で協力して役割分担をしているよ。男性が家事をするのは当たり前のことなんだ。子どもに介護をしてもらうことは

ないよ。子どもたちは大人になると家を出て行くし、介護が必要になると老人ホームに入ることが多い。費用も自分で払うよ。



ジャックさん

家事に関わる割合は女性のほうが少し多いように思うけど、だんだんとイコールになってきているよ。

介護については、長期の介護が必要になってくるとヘルパーを頼むことが多いよ。割合は少ないけど、家族が介護することもあるんだ。

施設で過ごす人もいるけど、多くの人は自宅で生活することを希望しているよ。



ウウムさん
(インドネシア)

家事は男性も手伝うけど、女性が主にやっているわ。朝は洗濯、朝食など毎日大忙し…(笑)。

介護は、男女関係なく家族みんなで行っているわ。

職場での環境のしるし

Q 日本では上司は男性が多いですが、あなたの国ではどうですか？
また、日本では長時間労働が問題になっていますが、あなたの国では残業はどのくらいありますか？



A
ティムさん

アメリカではだいたい40%以上が女性の上司だよ。

残業はほとんどせず、みんな定時には帰宅するのが当たり前なんだ。

お金のために残業をすることはあるけど、何日も続くようだと会社から注意を受けるんだ。ちなみに仕事が終わるとまっすぐ家に帰るよ。日本人のように帰りに同僚と飲みに行くようなことはほとんどないんだ(笑)。



ラマさん
(インドネシア)

職場には女性も多く、女性の上司もたくさんいるよ。

残業もあるよ。家族を養うために仕事も大切だけど、家庭も大事だからバランスが大切だと思うよ。

Q 男性または女性なら就ける職業、就けない職業がありますか？



ティムさん

A 会社が人材を募集するときに性別、年齢、国籍を絞ってはいけません。どんな仕事であれ、それに見合った能力があれば希望する職種に就くことができますよ。



ジャックさん

男性が多い職業があるのは事実だよ。ただ、男性または女性だからどうしても就けないという職業はないよ。



アンドリさん
(インドネシア)

仕事をする上で性別で差別を受けることはないうよ。

DV(※1)について

Q DVはありますか？あるとすればどんな対策をとっていますか？相談機関などはありますか？また、男性と女性、どちらがDVをおこしやすいですか？



ティムさん

A 暴力を受けたら被害者を助けるセーブハウスという場所があるよ。DVをおこすのは、以前は圧倒的に男性が多かったけど、最近は男性が被害者になる件数も増えてきているよ。



ジャックさん

イギリスでは4人に1人がDVを受けていると言われているよ。中には亡くなってしまいう人もいんだ。相談機関はたくさんあって、充実しているよ。



リンさん

DVは、ほとんどないと思うわ。暴力を受けたりすることもないし、問題になっっているようなこともないわ。

職場でのパワハラ(※2)、セクハラ(※3)もないわ。

※1 DV

ドメスティックバイオレンスの略

配偶者や恋人など親しい関係にある男女間における身体的、精神的、性的、経済的暴力のこと

※2 パワハラ

パワー・ハラスメントの略

※3 セクハラ

セクシュアル・ハラスメントの略

結婚について

Q 夫婦別姓は日本では認められていませんが、あなたの国ではどうですか？また、結婚に対する男女の考え方はどうですか？



ティムさん

A 姓についてはどちらを名乗っても問題ないんだ。子どもも自由で、それぞれの姓を合わせて名乗ることもできるよ。

制度婚については、男女ともあまり重要ではなくなっているよ。

男女が一緒に暮らし、良い関係を維持することが重要なんだ。

だから、事実婚の人もたくさんいるし、子どもができたからといって結婚するわけでもない。結婚してなくても子どもが法律的に不利益を被ることはないんだ。



ウムさん

インドネシアでは苗字がないから、夫婦別姓についての概念はないわ。また、子育てと結婚はとても大切だと思うの。インドネシアでは独身の女性はまだ少ないわね。



ジャックさん

男女別姓、同性婚、事実婚とも認められているよ。イギリスの男女は日本人ほど制度婚にこだわっていないと思うよ。

※インタビューの回答は回答者にとりまく地域での意見によるものです。



インタビューを終えて



谷岡記者



今回のインタビューを通じて気づいたことが3つある。

一つ目は、一般的な日本人にとって「人権」や「男女平等」は意識して行動するものだが、イギリス（ヨーロッパ）の方にとっては、それらは特に意識せずとも当然そこにあるべきものにとらえているように感じた。

二つ目は、一般的な日本人にとって「子ども」や「結婚」は個人や家族、家どうしのもので考える傾向があるが、イギリス（ヨーロッパ）の方にとっては、特に「子ども」は社会の共通財産のような考え方をもっていて、「結婚」にしてもあまり個人に固執してないという印象がある。

三つ目は、インタビューに関係ないかもしれないが、外国の方は思ったより日本の制度に興味があるのだなと思った。インタビューをするのと同じくらいに日本のことについても質問を受けた。ということは、日本が世界に生活モデル

ルを提案する可能性も案外あるような気がした。
有意義なインタビューであったと感じる。



岡本記者



頑張ります！とは言ったものの「外国の方に取材なんてできるかな？日本語通じないよ〜」と正直、不安だった編集委員1年生の私。

しどろもどろの英語で、インドネシアとフィリピンの方にお話を伺いました。

どちらの国も家族文化が強く「男性だから・女性だから、こうあるべき」の固定された枠組があります。

家族を侮辱することは許されないと、個人が尊重されている社会だと強く感じました。

保育や介護の面でも行政や他人任せにせず、家族が協力して行うことが人を大切にする国を築いていくんだろうな、と改めて思います。

今回、快く取材を引き受けてくださった皆さん、ありがとうございました。



渡辺記者



今回のインタビューでタイムさんには快く気さくに答えていただきました。

記事に載せていないこともたくさんあります。

特に驚いたのは、亡くなった人に対する風習の違いです。亡くなった人を家に連れ帰ることは犯罪に当たることや、日本のようにお盆やお彼岸、法事といった行事や習慣はなく、家族でも墓地は別々で、葬儀を終えると再び墓地に行くことはほとんどないそうです。

結婚や子育てについても、また男女に対する考え方も、それぞれ個人を尊重し、制度や形式にとらわれずに対応しているように感じられました。

男女共同参画：アメリカと日本、考え方や慣習は違っていますが、お互いが相手を思いやる気持ちを感じることが大切だと感じました。また、いろいろな国の制度や習慣・考え方など、良いものは積極的に取り入れ、住みやすい地域になればすばらしいことだと思いました。

編集後記

編集委員長 川本 太間

新見市へ在住されている外国人の方々に、日本との違いについて男女共同参画の視点から、話をお聞きする機会があり、「りぼん」への紹介となりました。

いろいろな事情で祖国を離れ、新見の地での生活を、彼ら彼女たちはどのように感じているのか、また、この国、日本がどのように映っているのか不安でもあり、興味のあるところでもありました。

取材に快く協力をしていただき感謝する次第です。内容によっては答えにくい項目も含まれていましたが、真摯に回答をいただき頭の下がる思いです。

手前みその話ですが、インタビューには、編集委員の通訳担当、岡本さんの英語力の存在も大きな戦力になりました。

イデオロギー、宗教といった、環境の違いで争いごとの絶えないこの世界で、唯一無二の存在として人がいるのか、などと哲学的に考えてしまい、自分自身も、もっと、もっと、グローバルな人間でありたいと思うようになりました。その前に、もちよつと、英語の勉強したほうが：「はよ、いんてによ」